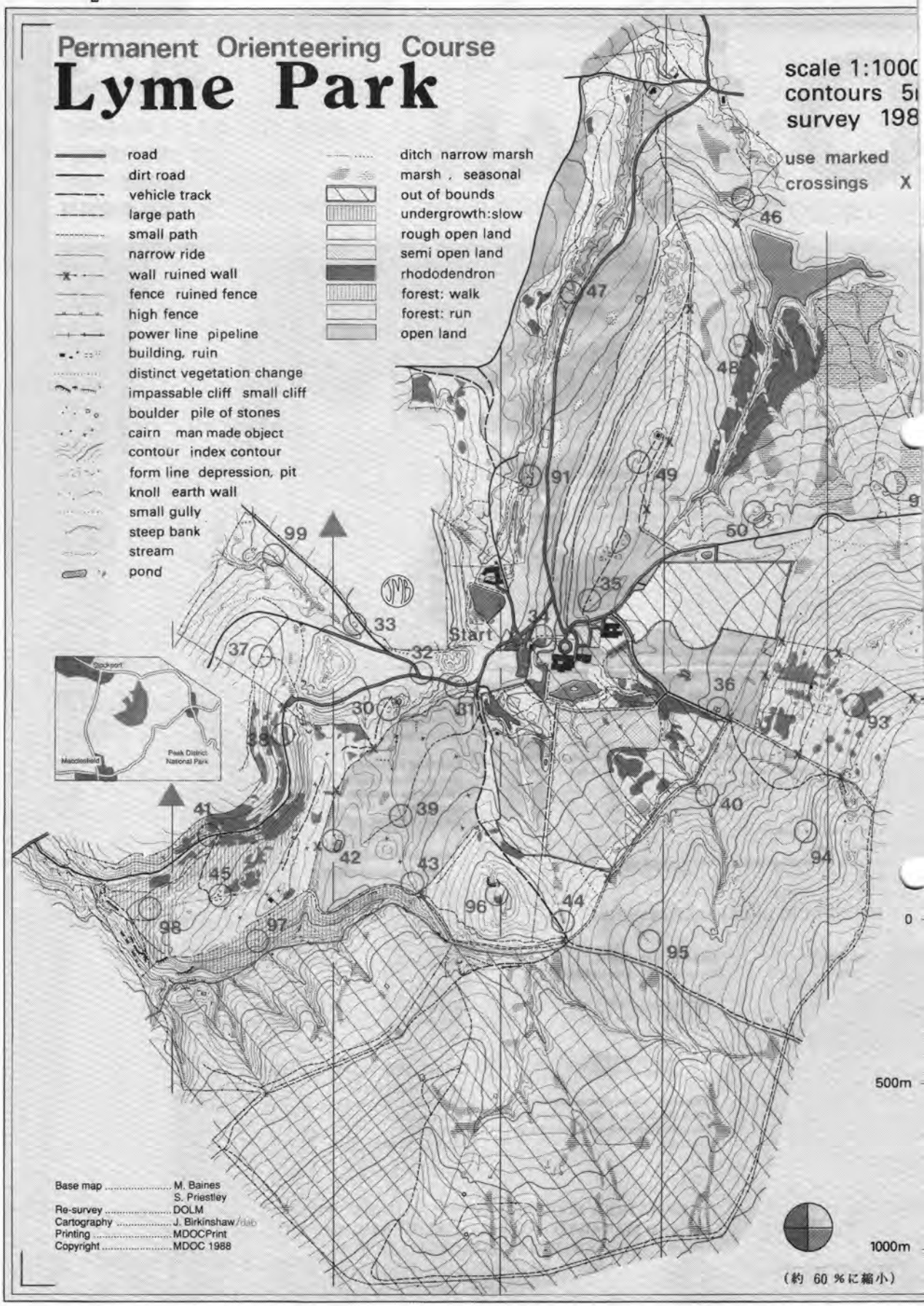
ORIENTEERING JAPAN

O-JAPAN

シンキングスポーツ・オリエンテーリング

'92/3

1992年〔平成4年〕3月10日発行
(毎月1回10日発行)
第9巻第3号通巻第104号
昭和63年6月24日第三種郵便物認可


Permanent Orienteering Course
Lyme Park
scale 1:1000
contours 5
survey 198
use marked
crossings X
road
dirt road
vehicle track
large path
small path
narrow ride
wall ruined wall
fence ruined fence
high fence
power line pipeline
building, ruin
distinct vegetation change
impassable cliff small cliff
boulder pile of stones
cairn man made object
contour index contour
form line depression, pit
knoll earth wall
small gully
steep bank
stream
pond
ditch narrow marsh
marsh , seasonal
out of bounds
undergrowth:slow
rough open land
semi open land
rhododendron
forest: walk
forest: run
open land
Start
Stockport
Macclesfield
Peak District National Park
500m
1000m
Base map M. Baines
S. Priestley
Re-survey DOLM
Cartography J. Birkinshaw/dab
Printing MDOCPrint
Copyright MDOC 1988
(約 60 %に縮小)

O-JAPAN もくじ

９２／３月号・№１０４

●「オーストラリアの原野を走ろう」
続々・タスマニアツアー報告
船橋　昭一，山下　実 4-11

●＝イベントリポート＝ 12-14
「第８回ウェスタンカップ
リレーＯＬ大会」
「多摩ＯＬ・第９回ジュニア
チャンピオン大会」
「第２回関東高連競技会」

●Ｏ－ＦＯＲＵＭ 15
◇オリエンテーリングの
普及発展観　三科　伸之
◇オリエンテーリング大会開催の
マナーについて　前田　亮一

●＝パーマネントコースりぽ～と＝
木佐木輝雄 16

●＝投稿＝
ＸＣ－ＳＫＩとＳＫＩ－ＯＬ雑感
美谷島　孝 17-18

＝海外誌から＝
世界のエリート達　齋藤　英之 18-19

●＝情報あれこれ＝
ＡＰＯＣ　プレ・イベント.....20

［今月の表紙］２月23日，早大ＯＣ大会より

［今月の地図］岐阜県・松井恒生氏から同じく上林弘敏氏に送られてきた，英国マンチェスター近郊のパーマネントコース地図。本誌掲載のため縮小しましたが，日本のＰＣとのポスト位置などの違いをご覧いただければ幸いです。

ストリーマー

春３月.....

例年だと２月末から３月中頃の間に「春一番」が吹くところだが，ことしはまだのようである。いや，もう春本番になってしまったようだ。先日，私のクラブで行なった大会の日もたいへん暖かく，ポスト付けに走った朝でさえ大汗をかいてしまった。その大会のために作ったマップも，でき上がりが気にいらず，折角期待していただいた方々にお詫び申し上げたい。１ヴァージョン前のマップを使わせていただき，ご迷惑をおかけしながらも何とか大会を開催，多少の混乱もあったが何とか終了することができた。もう少し調査を加えてから，あらためて作成し，できれば本誌へのとじ込みを考えている。１０年ぶりの作図であり超多忙な時を過ごしている現在のこと，多分秋になるだろうか。

さて，何ゆえ皆さんにご披露したいかと言えば，大都市・横浜に残された唯一とも言えるオリエンテーリング・テラインも年々形を変えつつあるところを，ぜひお伝えしたいからである。地図調査のために，久しぶりに訪れたテラインであるが，深い森の中から開けた小高い丘に上がってみた時，その状況の変わりように唖然とし，胸が痛んだ。その昔，数々の大会で使った尾根や沢はそこには無く，韓国から日本のＰＣを見学したいと訪れた人，新聞や雑誌社の人達を何回か案内したそのコースも無残に分断され，目の前に見えるのは有料道路の広大な料金所エリア，そして聞こえてくるのは，うぐいすの鳴き声ではなく車の騒音であった。私自身も車を使うので複雑な気持ちにはなる。ＯＬを始めた初期のころ何かに書いたことがある。このスポーツの前途は決して明るいものではない，と。宅地造成や道路建設はテラインをますます遠いところに追いやっている。身近なところではほとんど大会が開かれなくなり，都会人のためともいえるこのスポーツへ，初心者を誘い込むことが難しくなっている。特にファミリーやグループへの誘いかけは不成功に終わることが多いようだ。皆で考え意見を述べ合おう。

Ｔ

「オーストラリアの原野を走ろう」

続々・タスマニアツアー報告

文：船橋昭一（編集委員）
協力：山下　実（多摩ＯＬ）
小倉利一（朝日新聞社）

今回はＶＷＣ９２のレースを中心にリポートをします。日本からの参加は女子１１名（ＶＷＣクラス８名），男子２１名（ＶＷＣクラス１６名）の計３３名の参加です。地元ＡＵＳ，ＮＺＬはもとより，ＳＷＥ，ＦＩＮ，ＮＯＲの大団体のほか，ＡＵＴ，ＢＥＬ，ＤＥＮ，ＦＲＡ，ＧＢＲ，ＧＥＲ，ＨＵＮ，ＰＯＬ，ＲＯＭ，ＳＵＩ，ＴＣＨ，ＵＲＳのヨーロッパ各国，ＣＡＮ，ＵＳＡと世界の各地から参加しました。めずらしいところではＩＳＲ（１名），アジアからはＨＫＧ（１名），ＳＨＮ（１名）と日本を加えて３ヶ国です。ここで，ＶＷＣ参加のベテランを応援して下さった石川綾，宇治橋今日子，阿部倉智，宇治橋祐之，倉部淳，小倉利一各位の若いオリエンティアの皆さんにお礼を申します。特に，阿部倉，倉部の両氏には各大会のテクニカル情報作りその他で大切な時間を費やしていただいたことを記しておきます。なお，ＶＷＣ全体の公式成績は２／２４現在まだ入手しておりませんので，以下で扱うデータは速報と新聞‘The Examiner’の記事をもとに作成しました。したがって各位の記録の発表を割愛すること，一部のデータが欠けていることをお断りします。なお，文中一部の記事で敬称を省略しました。１月７日ＶＷＣ９２開会式では，清水良隆氏（M60Ａ・東京ＯＬクラブ）を団長に，日本チームの先頭を三好良子氏（W60・港南ＯＬＣ），そして梅野武康氏（M70・東京ＯＬクラブ）を旗手としてセント・ヘレンズの町を堂々と行進をしました。

■ＶＷＣ９２の設定

（１月２～１３日）

ＶＷＣ９２はその併設大会とともに１３日間のドラマである。１／２の受付，１／３のホバートにおけるプレイベント（競技），４日間併設大会ＦＣＯＣ（Foresty Commission O-Classic＝ＶＷＣと２日間重複），メインイベントのＶＷＣ，モデルイベント，さらにローンセストンにおけるポストイベントを加え，全部で７つの競技会を行った。この期間中“コーチング討論会”を行っているので，催しとしては最大級のものである。

日本の多くのオリエンティアはＶＷＣ大会出場が目的であったから，ここにスポットをあてて大会のリポートをしよう。テラインの配置を図１に示した。イベント２（Ev2）はＦＣＯＣ大会１日目でＡＰＯＣ８８のテラインが一部重複している。決勝Ｅｖ６(Final) のテラインは起伏が少なくスズ鉱石採掘跡の微地形を含んでいる。Ev４のＶＷＣ予戦第１日(Q1)とEv5，ＶＷＣ予戦第２日(Q2)のテラインの共通点は起伏が大きく，加えて大きな沢は湿地である。全く異なる点は，前者に岩・岩盤が少ないのに比べて，後者のEv6（ＶＷＣ，Q2）のテラインはいわゆるノルウェー形の岩石帯である。（本誌１月号参照）

ＶＷＣのコースの長さは予戦（Ev5・6）は控え目に組まれ，決勝のＡ-Final は予戦よりも長いコースになっている。たとえば，M35Ａでは Q1「8.3km↗290m」，Q2「7.4km↗250m」に対して，決勝Ａ-Final では「11.6km ↗130m」である。なお，決勝にＢ-Final を設けたクラスの距離は予戦のそれとほぼ同じか短くなっている。

■予戦第１日＝Event ４

（１月７日）

マップは１／１万，コンターは２ｍである。テラインをさらに詳しくみよう。下ばえがあるユーカリの林，起伏があって，帯状の湿地帯（帯状に通行困難）とスズ鉱山跡（深い溝）がある。部分的に岩場があるが競技には問題はない。林の中は早いスピードで走行が可能である。（本誌１月号［今月の地図］裏表紙南西部の地域はこの日のテラインにつながっていて，テラインの特徴は全く同じである。）ユーカリの林の植生の状況例は下の写真を参照していただきたい。

さて，この日の代表的なレッグと思われる一例を図２に示した。図２のレッグはM35Ａ2 のもので，このコースは 1.8 kmのロングレッグを２つ（⑤→⑥，⑦→⑧）に含んでいる。②→③のルートはラフコンパス走の直進を主に，コントロール③北西のピークの南を巻くのが良い。アタックは③の西の大きな岩がけ，あるいは③の北西の沢筋からが適当である。この種のテラインでは歩測・コンパスナイゲーションは重要で，常に位置確認と修正が必要である。リロケーションの大きな助けになる特徴物はレッグ2/5 の位置にあるタマゴ形のヤブと③の東約300mの位置にある深い沢である。このレッグを走った１位のEgil Johansen（1976，1978年ＷＯＣ優勝者）のコースタイムは，53分26秒（8.3km ↗290m），平均６分24秒／km，予戦第１日で一番早いランナーであった。

ユーカリの大木（代表的な植生）

←図1　VWC92のテライン配置図

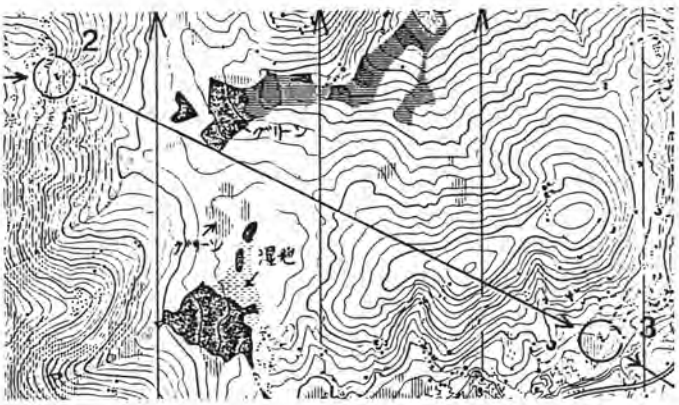


図2　VWC Q1 M35A1
のレッグ　(1/10000, 2m)

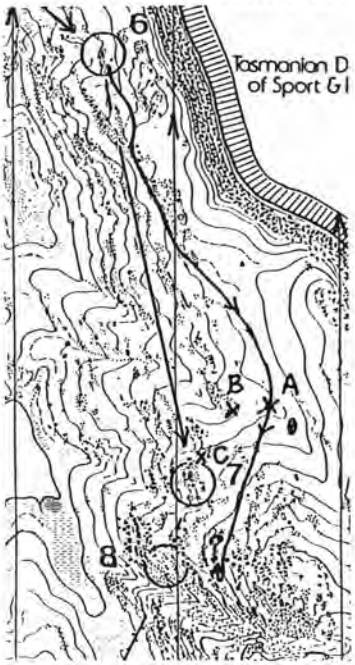
VWC92参加数の多い国を見ると，SWE 383名，FIN 192名，NOR 141名，GBR74名の計 790名である。この4ヶ国で既に大会参加者の半分を占める。これに対してAUSは 628名の参加である。予戦第1日VWC全16クラスのうち1位をとったのは，NOR男子5クラス，SWE男子2，女子3クラスという具合にヨーロッパ勢，それもNORとSWEが圧倒的な強さを見せた。結局この両国の勢いは決勝まで変わらなかった。予選第1日，石井龍男（M40A2）は4位に入り健闘した。同じクラス出場の山下実は体調が悪く30位，しかし立派な成績である。日本人ランナーの多くは1位との差が20～30分以上である。レース中10分以上の間完全に現在地を見失ったランナーが何人もいたのではないだろうか。ランナーの速さのデータは後の表を参照されたい。総じて，日本勢は各クラスの参加者共走力が低い。私達はもっと早く走り，ナビゲートする技術を学ぶ必要がある。

■予戦第2日＝Event 5
（1月8日）

私達の宿舎 Falty Towers（写真2）はセント・ヘレンズの南西72kmにあるFingalのアウト・ドアー施設である。VWCの全ての大会をここから臨んだことになる。チャーターバスは2台（これで本当によかった），早いスタートの者は6時30分頃，遅い者は7時30分宿舎を出発，時速 120kmでタスマニア・ハイウエー（一般道!!）を驀進する。（休息日を含めてみんな本当に活発だった。）

今日は岩，岩石帯が累々と連なる海辺の半島 Coles Bay大会である。花崗岩帯の形成する複雑なテラインで，起伏が大きく速い走行は期待できない。前日の予戦よりもコースは平均1kmは短い。意外に思えることは予戦第1日よりも登距離が低く抑えてある。たとえば，M40A1では前日のQ1で 230m なのに，Q2の今日は 135m である。この傾向は全クラス変わらない。アルプス登山のようなスタートへのアプローチを過ぎて，寒さに耐えたあとのスタート。図3のような岩・岩石帯とワラビやシダ類の下ばえ，さらに膝の高さの灌木帯（図3の白い部分）を

図3　VWC Q2 M50A1
のレッグ　(1/10000, 5m)



宿舎 Falty Towers =Fingal=（左奥）の構内遠望

走る。高い植生は全てユーカリである。図3のレッグは筆者の出たM50A1 のレッグである。筆者はこのレッグで大きなミスをした。⑦の北東 100m の沢に出た後，不注意な現在地の確認（Bの沢の変曲点をCの沢の上部と誤認）だけで⑧の南の沢近くまでオーバーランをして現在地を完全に見失ってしまった。図のA地点に出た時，B地点の沢の曲り，さらにアタックポイントとして，C地点の沢の上部を捕らえるべきである。ラフOでA地点に出た後，コンパス走だけで⑦にアタックしたのはOLのイロハを忘れたものといってよい。この日M50A1 の1位はFINランナーでコースタイム45分02秒（5km，8分24秒／km）であった。予戦第2日の1位を占めた国々は，NOR 6クラス，SWE5クラス，FIN4クラス，AUS1クラスである。気になるトップの走力と日本人ランナーの走力は8ページの表1［VWC予戦第2日，決勝］に示す。このデータは海外O－Event のエントリーにも大いに参考になる。予戦2日間好走者は久保君子（W55A，24位），石井龍男（M40A1，18位），清水良隆（M60，38位）であった。2つの予戦を終えて，いよいよ決勝は2日後，VWC92の最も難度の高い35才クラスの予戦上位を見よう。

☆予戦第1日

W35A (6.6km↗230m)

1. Anme Salisbury (GBR) 57:31
2. Gro Johansen(NOR) 60:26 第2日6位
3. Jenny Bourne(AUS) 61:54 第2日5位

M35A1(8.3km ↗290m)

1. Morten L'aid(NOR) 56:36 第2日21位
2. Veli Heikkila (FIN) 57:40
3. Darryl Smith(AUS) 61:54 第2日5位

M35A2(8.3km ↗290m)

1. Egil Johansen(NOR) 53:26
2. Lars Persson (SWE) 55:38
3. Mark Wilmott(AUS) 58:32

☆予戦第2日

W35A (5.6km↗220m)

1. Unni Karlsen(NOR) 56:39 第1日11位
2. Anme Salisbury (GBR) 58:33
3. Anne Pyykonen(FIN)59:31 第1日16位

M35A1(7.4km ↗250m)

1. Heikka Peltola(FIN)51:03第1日7位
2. Veli Heikkila (FIN) 58:01
3. Nicholas Wilmott(AUS)58:07

M35A2(8.3km ↗290m)

1. Egil Johansen(NOR) 52:02
2. Lars Persson (SWE) 53:02
3. Mark Wilmott(AUS) 54:33

ヨーロッパの強豪の中で男女共地元AUSが健闘している。Anne Salisbury はイギリスの女子チャンピオンで，前評判通り安定したランナーである。Gro Johansen(Egil Johansen夫人）は2日目に崩れた。一方，男子A1 クラスはかなりの乱戦模様である。これに対して，A2 の上位3人は全く安定したVWC－Oを見せ，それぞれの順位が変わらないことも興味深い。筆者は2日目の速報を見て，Final は Egil Johansenの優勝と思っていた。

■VWC決勝前日の休息日は有用

予戦を終え，9日は休息日である。セーターを手放せない寒い日中からようやくタスマニアの太陽が宿舎Falty Towers にもやってきた。休息日の出来事の一端はあとの余話にゆずることにして，気のついたことを述べよう。

決勝のテラインは予戦第1日に隣接し，いっそう平坦な所である。植生はユーカリと背の低い松（一部見通しはよくない）が主ある。本誌2月号で示したように微地形（スズ鉱山跡）を含んでいるが，走力は上がると予想した。実際，決勝A-Finalのコースは予戦よりも長くなったが，登距離はだいぶ低くなっている。筆者の気付いた点は，予戦のあと一日休息をとった効果が男女共50才以下の参加者にはっきりと現れているのに対して，60才以上の参加者は男女共予戦より走力（km／分）が落ちている。1日の休息で精神的に十分回復していることは確かであるが，体力的な回復が十分ではないと思われる。それにもかかわらず，VWCの決勝の前日の休息は必要かつ有用である。はからずも，休息日の正当性を裏付けることになった。

■決勝コースセッターの横顔

VWC92の併設大会，予戦，決勝の地図とコースの作成で大きな役割を果たした2人を紹介しよう。1人はChristine Marshall，1981年から1991年まで世界選手権（WOC）5回出場のオーストラリア第一人者である。　もう1人は Mike Morffew，彼の本業は地図作図者である。

Christine Marshal

Mike Morffe

☆Christine Marshall

ＶＷＣ９２組織委員会の技術責任者である。Chrisnine は15才でＯＬを始め，初の大会出場は1978年タスマニア Ride-way Reserve の大会のW15クラスである。1980年Paciffic O-Championship ＝現ＡＰＯＣ＝のW17で優勝，1981年18才でＷＯＣオーストラリア代表になった。以来連続２回ＷＯＣ出場，さらに1989，1991のＷＯＣヨーロッパ遠征でオーストラリア・チームのキャプテンを務めた。彼女は現在ホバートの Clarence 中学校の体育の教師である。Christine のＯＬに対する情熱は自分のトレーニングはもとより，生徒の指導，初心者指導，大会の企画と運営，Ｏ－マップの作成といったように非常に多岐にわたっている。1989，1991年の２回にわたって，タスマニア年間最優秀スポーツ選手に指名されているが，タスマニアの有力スポーツ新聞 The Examinerのコラムニスト評は次のようなものである。「抜群の競技力をもつ選手であって，一種独特の雰囲気をもっている。この人のかもし出す雰囲気そのものがＯＬの成果と強さの秘密のように思える。彼女の栄誉は他のスポーツばかりでなく，スポーツとしてのＯＬそのものの名誉である。」 Christine の今回の役目は大会技術責任者であって，競技進行の責務を果たした。特に大会前の悪天候による増水で，大会が進行する最中，モデルイベントと併設大会の開催日が急きょ前後して変更になった。相当な苦労を余儀なくされたことであろう。Christine の役目は競技責任者，決勝コースセッターにとどまらず，予戦第２日のＯ－マップ12km²の調査点検も行った。

☆Mike Morffew

ＶＷＣ９２組織委員会の地図作成責任者である。出発前にＯ-JAPANの田口さんにあらかじめ彼のことを聞いていたので，併設大会の行われた３日，大会会場で彼を探し当てた。身長 175cm程の好青年であった。 Mike はホバートにある印刷会社 Mercury-Walchに勤めている。彼の責任は大会に使用するテライン 50km²の地図の製作である。このため，1990年２月以来ほとんどの週末を Suncoast で費やした。ホバートからセント・ヘレンズまで片道250km，有に４時間はかかる。走行距離 30,000km だってというと笑っていた。今回 Mike の調査担当区域は12 km²，そしてさらに12 km²以上の 確認調査に臨んだ。彼の平均の調査時間は１ km²当り40～50時間である。ＶＷＣ９２の成功の秘密のひとつは，Mikeのように本職の作図エンジニアが参画したことによると見てよいだろう。ＶＷＣ９２のモデルイベント，予戦第１日，決勝のＯ－マップは Mike 一人の作図によるものである。その大きさはＡ１全紙（１／１万）である。これはちょっと例がない。彼はＡＰＯＣ８８のマッパーも務めた。作図者になった動機はこうである。彼が Rosny Martriculation Collegeの学生の時，現在のオーストラリア・チームコーチ Clive Roperと共にＯ－マップの製作を経験，ＯＬのとりこになったという。以来ずっと毎年平均１枚のフィールドワーク図を作成し，数枚のＯ－マップの作図を続けている。これと平行して彼はコースセットにも専念し，活動を続けている。（この紹介記事は大会プログラムの一部を引用しました。）

■ＶＷＣ決勝［Event ６］

参加者が80人を越えるクラスの決勝はＡ－Final とＢ－Final に分けて行い，それぞれの人数は均等割とし，その最大数は80人である。つまり，80人以上(160人以下）の参加者がいるクラスでは，予戦総合成績が上位半数以内であればＡ－Final に出場できる。参加者が80人以下のクラスは全員Ａ－Final に出場できる。今回は16クラス中W45，M35，40，45，50，55，60 の７クラスがＡ－Final とＢ－Final を行い，他はＡ－Final を行った。日本人ランナーの決勝クラスの出場状況は次ページの表の通りである。なお，男子M45のクラスは 190名の参加により，３つのクラス・M45Ａ１～３に均等に割って予戦を行い，各クラス予戦総合成績27位までの者がＡ－Final，残りのランナーはＢ－Final，Ｃ－Final に出場した。愛場庸雅（M35Ａ），海老沢正（M40Ａ），石井龍男（M40Ａ），清水良隆（M60Ａ）４氏のＡ－Final 出場は立派なものである。

決勝はさきに紹介した Christine Marshallと Mike Morffew ２人のコースセットにより競う。テラインは微地形を含む平坦地（前項および本誌２月号参照）である。Ａ－Final の若いクラスのコースは予戦よりも２～３km長く，Ｂ－Final のコースとM65以上のクラスは予戦のコース距離と同程度に組まれている。全てのクラスの登距離は低くなって，M35Ａでさえ 130mである。スピードのある決勝になった。その速さを見てみよう。表１から注目できる部分を抜き出してみよう。

［１位の速さ］

M35A(A-Final)	11.6km↗130m	66:40	5:48/km
M40A(A-Final)	9.6km↗135m	64:09	6:42/km
M40A(B-Final)	6.1km↗ 70m	56:27	9:36/km
M45A(B-Final)	5.0km↗140m	46:01	9:12/km
M50A(B-Final)	4.8km↗ 50m	42:47	9:18/km

これは男子の場合である。女子については資料不足でコメントが難しい。筆者はこの数字を現在の“世界的なレベル”と思っている。すなわち，35才男子のトップランナーは１kmを５分台後半で走り，40才男子は６分台後半の速さで走る。一般に言って，Ｂ－Final 出場の上位者はＡ－Final 出場の上位者よりも２分程度遅い。かなり大胆な推測であるが，あまり外れてはいないと思う。というのは，決勝では山下実，そして筆者自身もＢ－Final でベストに近いＯＬができたからである。

ところで，Egil Johansen はＶＷＣ９２の勝者になれたであろうか。速報を見に行こう。

Ｍ３５Ａ(Final)

１位	Lars Persson	(SWE)	66:40
２位	Egil Johansen	(NOR)	70:09
３位	Roger Anderson	(SWE)	70:11

Johansenの優勝はならなかった。どこかでミスをしたのだろうか。決勝後，セント・ヘレンズ中学校で行われた表彰式では，この３人の勇者が揃って全員の祝福を受けたことはいうまでもない。

ＶＷＣ決勝の成績でよかったのはM40Ａ（Ｂ－Final）３位の山下実である。筆者のクラブメイトであるが，決勝レースの一端を紹介してもらうことにした。読者は本誌２月号「今月の地図」を開けてほしい。幸い次に語ってもらうM40Ａ（Ｂ－Final）の全コースが載っている。これから取り上げるレッグ内の亀裂表示の溝はスズ鉱石の採掘跡であって，深く渡れない部分がある。

に楽しかったと思う。

Derbyshire DE42HX
England

ＶＷＣ表彰式
M35Ａの勝者

THE
Veterans' World Cup
1-5 AUGUST 1994

表 1

VWC 予戦 第2日・決勝の記録

		Event5 VWC予戦 第2日			Event6 VWC 決 勝		
クラス（参加数）	出走者	距離・↗ 順位	1位タイム タイム	1位国名 分：秒／km	距離・↗ Final クラス	1位タイム タイム	分：秒／km
W35A（54名）	愛場 孝子	5.6km 220m DSQ	56：39	NOR 10:06	A8.7km 105m A45位	69：53 210：22	8:00 24:12
W40A（63名）	若梅 節子	5.3km 170m 36	57：40 95：49	NOR 10:54 18:54	A8.3km 100m A	? 133：41	? 16:06
W50A1（38+39名）	石川 怜子	4.1km 130m DNS	53：00	NOR 12:54	A6.4km 125m DNS	?	?
W55A（52名）	久保 君子 池田 富子	3.2km 120m 24 27	39：08 61：22 66：11	SWE 12:12 19:12 20:42	A5.0km 90m A A	52：24 67：01 [illegible]	10:30 13:24 [illegible]

～VWC92 余話～

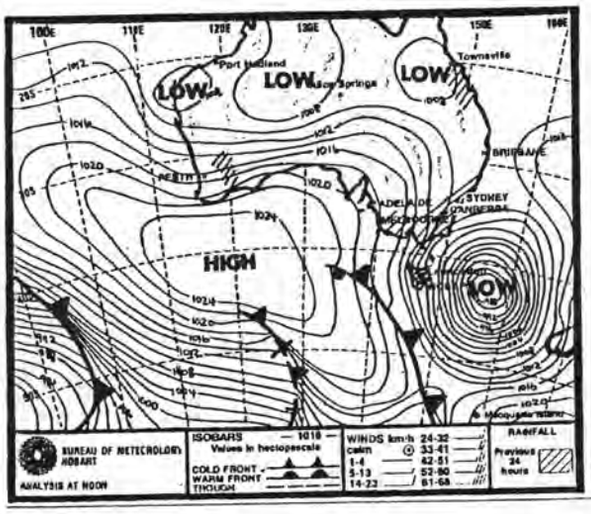
◎大会日程も変えた正体は何だ！！

1月2日タスマニア・ホバートに到着後，4日フィンガルの宿舎Falty Towers到着まで，寒く雨と曇天が続いた。Fingal Valley を走るバスから見る景色は一面の牧場が続く。しかし異常な光景が目に映る。北東に向う車の右手の山（Fingal連山）のふもとの川がいたる所で溢れ，線路を越え，道を越え，洪水の様相を示している。日本ならば大変な騒ぎになるところだが，と思っていた。果たせるかな大会は増水のために5日予定の併設大会（Event 2, FCOC第1日）と6日予定のモデルイベントが前後して変更になった。主催者はこの時期予戦第1日のテラインを含め主要な場所で懸命に丸太橋をかけたり，ロープを張ったりの重労働をしていたのである。大会日程を変更してさえ参加者は腰までつかる渡河OLを味わった。正体は，参考にあげた天気図＝1月7日（木）＝の右下に見える985mbの低気圧で（南）東に向って毎時約25ノット（46km）で移動している。これは日本を襲う台風に相当し，東京から見て八丈島辺りを南東に向って移動するのとほぼ同じである。それでも地元は台風などとは言っていない。極端な乾燥から山の自然発火を心配することが先であるからだろうか。既にこの低気圧はタスマニアの東の海上に去り，全てのランナーがそれこそVWCを心ゆくまで味わうことができた。失敗のくやしさも伴って。(天気図は1月7日，The Examinerから)

◎本当に助かった救護

そして赤十字ボランティア

大会主催者が心をくだく問題のひとつは救護組織である。筆者はたまたまひとつの経験をした。1月6日，VWC併設大会（FCOC, Day1）がセント・ヘレンズ近郊で行われた。午後1時頃，タスマニア・ツアー参加の井上直子さん（W55A，福岡市）の負傷を知る。その後会場の救護所，病院とまさに世話になった。VWC全大会を通じて救護はセント・ヘレンズのボランティア組織であるSt. John 救急隊が一手に引き受けていた。ここで地元紙 The Examiner から一部を引用しよう。「St. John 救急隊のモットーは笑顔でサービス，しかも無料！救急隊はオリエンティア医師（Dr. Stewart Michell）と6人のスタッフで構成。Michell 氏がレースに参加中はホバートから別の医師がバックアップをする」という体制をとった。なお，St. John 救急隊は1988年のワールドカップの救急も担当している。1月6日（FCOC Day 1，参加 1640 名，テラインは岩，湿地が多い），7日（VWC予戦第1日，参加 1680 名，テラインには岩は少ない）両日に扱った救護の概略を見よう。「一番の大きな負傷は手首の骨折（井上さんのこと），18 件の足首の捻挫，少し縫わなければならない裂傷が数件，そのほかは軽い切り傷，すり傷であった」という。ところで，救急隊のひとつの関心事は破傷風の感染であった（現に，石井龍男さんは1月3日のVWCプレイベントの折りに，救急隊の指示で地元医師に破傷風予防の治療を受けている。（O－JAPAN 1月号参照）



1992年
1月7日
の天気図

さて，筆者も井上直子さんの後を追い，大会役員の車でセント・ヘレンズの診療所を訪ねた。医師にレントゲン写真を見せられ，全治5週間の怪我と言われた。気丈な直子さんであったことが救いである。ここの医師から，しっかりした治療のためには Launceston General Hospital（セント・ヘレンズから 167km 車で2時間）に行く必要があると聞いた。窓口で出発まで40分待つように言われてその意味がわからなかった。とにかく善意にすがるだけであったから，1時間後ようやく車で目的の病院に向うことになった。（あとで判ったことだが，私達を迎える車はセント・ヘレンズから40分の Fingal からの応援であった。）オーストラリア赤十字で訓練を受け，認資格をもつマリリンさんに全てを話した。ローンセストン病院でしっかりした治療を受け，宿舎 Falty Towers に戻るまで約8時間，さすがにマリリンさんにも直子さんにも疲れが見えた。ここで受けた善意に厚く感謝したい。思うに，St. John救急隊－St. Helens Hospital－ St. Helens Medical Center－マリリン夫人－Launceston General Hospital のリレーは完璧であった。

◎小倉氏 大うなぎと格闘する！！

＝1月9日・休息日＝

予戦が終って休息日，バスを使っての遠出組と宿舎での休息組に分かれて一日を過ごす。小倉さんは1人で釣りを楽しんでいた。筆者を含め10人ばかりを宿舎の主人スコッティ氏がブッシュウォークに誘ってくれた。金鉱の跡やアスレチック場を回り，フィンガルの里を存分に楽しんだ。私達は宿舎 Falty Towers のわきを流れる South Esk River をボートに乗って戻ってきた。2時間程過ぎて，夕刻5時頃であろうか，セント・ヘレンズに行ってもらった倉部氏のグループの帰りが遅い。そこへ小倉さんが“青い顔”をして現れた（その時はそう思った）。「えらいもの釣っちゃった!!」といったように思う。何と80cmはあろうかと思うウナギである。まさかこんな所で!! ようやく気をとり直した小倉さんも記念の写真を撮ったりしてようやく平静に。もちろん，このウナギ，筆者がさばき，石井さんが蒲焼きを作って，夕食時全員の胃袋に入ってしまった。

◎VWC92
真のベテランは88才＝M85優勝

SWEの Bertil Nordenfeltさん（88才）はM85に参加，VWC92最高齢参加者である。彼が Finish に近づくとアナウンサー Piet Filet （33才，Ugly Gully Club）の声が一段と高くなる。ゴールで待ち受けるファンの声，そして声援も一段と高くなって感動的だった。1月7日，VWC予戦第1日M85のコースは 2.5km（↗70m），Nordenfelt氏のコースタイムは4時間12分，世の中にはすごい人がいるものだ。（スポーツ紙 The Examinerが伝えるところによると）予戦第1日レース中 Nordenfelt さんは最終コントロールに達する前にコースマップを無くしてしまった。残りのレッグは全て記憶のみでゴールをしたという。Finishを越えた Nordenfelt さんは満面笑みを浮かべ，途中で摘んだ花を夫人にプレゼント。誰もが立ち上がり声援を送りたくなる。このようなランナーと共にレースを行う大会こそIOF－VWCのめざすものである。

（終わり）

VWC92　閉会式（1月10日 pm 7:00）
H85出場　スウェーデン Bertil Nordenfeltさん
満場の拍手に答える

VWC92　閉会式（St.Helens 中学校）
表彰台を見つめる各国のオリエンティア

宿舎 Falty Towers 散策：
山下　実（左），小倉　利一（右）両氏

O－JAPAN ツアー　一行の記念撮影

第８回 ウェスタンカップ リレーＯＬ大会

●１９９２年１月１９日
● 大阪府・交野市

関西ＯＬ界のメイン行事であるウェスタンカップ・リレーＯＬ大会は今年で８回目を迎え，今回は大阪ＯＬＣの主催で，１３２チーム・約４００人の参加を得て，１月19日に小雪の舞う中行われた。

ＨＡではＯＬＰ兵庫・橋本が１走でトップを奪い，京都大学，広島大学が追う展開となり，２走では京都大学のエース中村の快走で京都大学が２位の広島ＯＬＣに６分以上の差を付け，逃げ切るかとおもわれたが，３走でＯＬＰ兵庫の井上が再逆転，見事２年ぶり５度目の優勝を飾った。２位には京都大学，３位には広島ＯＬＣが入り，昨年優勝のＯＬＣふるはうすは４位に終わった。

ＤＡでもＯＬＰ兵庫の松本がトップで２走の松波に渡したが，２走ではＯＬＣレオの西田と橘女子大学の塩野が見事な走りをみせ，ほとんど同時に３走に渡し，この時点でＯＬＰ兵庫には６分の差を付けた。しかし，ＯＬＰ３走のエース出田がこれまた快走を演じ，一挙にひっくり返して２位に４分以上の差を付け，２年連続５度目の優勝を飾り，３度目のアベック優勝を成し遂げた。２位にはＯＬＣレオ，３位には橘女子大学が入った。

Ｊクラスは２走の段階で茨木高校が上位３位までを占め，そのまま逃げ切り昨年に続いて優勝を飾った。

それでは，各クラス優勝チームのメンバーから感想文が寄せられているのでご紹介しよう。

［ＨＡクラス・ＯＬＰ兵庫　“ＯＬＰ鬼ころし”］

☆１走・橋本　裕志

会場からスタート地区までの７００ｍの道走りの間，地図を見ることが許されなかったのがレースの展開に大きく影響したようだ。僕は難なくスタート→①とクリアできたが，多くのチームがこのレッグで早くも散って行った。①直後の尾根走りで勝負にでて成功し独走体勢に入れたのだが，後半，集中力を欠いてロスタイムを重ね，２位・川前（京大），３位・太田氏（広島）にかなり差を縮められてしまった。結局，彼らをわずかにかわしてトップで２走・藤井さんにタッチしたが，波乱含みのレース展開の原因を作ることになった。

☆２走・藤井　範久

ほっとした，というのが本当の気持ちである。橋本からトップでタッチを受けてスタートしたものの，２番コントロールでミスをしている間に弘太郎に抜かれてしまった。その後もコントロール周辺で２０～３０秒のロスを繰り返し，最後には広島ＯＬＣの下江君にも抜かれてしまった。京都大学チームとは７分も差を付けられてしまったのである。そして，健ちゃん（井上）でも逆転するのは少し難しいかな，と思って待っていたのだが，トップでラス前通過のコール。思わずガッツポーズ!!“ありがとう橋本，ありがとう健ちゃん!!”という気持ちでいっぱいである。本当にありがとう（ただ残念なのは，まだあの大きなカップでお酒を呑んでいないことである）。

☆３走・井上健太郎

ＯＬＰ兵庫の一員としての初めてのＷ－ＣＵＰでＶ奪回に貢献でき，非常にうれしく思っています。もともとリレーは苦手だと思ってたのですが，都道府県対抗リレーで少しの自信とくやしさを味わって，Ｗ－ＣＵＰではぜひ頑張りたいと思ってました。３走でタッチを受けた時は，京大と予想以上に差があいてましたが，相手がミスをしてくれれば抜けないことはないと信じて走りました。レース後半で広島ＯＬＣをようやく振り切り，その直後京大を抜いていることを知った後は，走っていてうれしさがこみあげてきました。ゴール前でのみんなの声援や走り終った後の充実感はインカレ以来のようで，とても心地良かったです。来年もＶ２目指して頑張ります。

［ＤＡクラス・ＯＬＰ兵庫　“ＯＬＰ爛番娘”］

☆１走・松本　真紀

走る前は「よく地図を見て，現地を細かくチェックしていこう」と心に決めた。スタートしてからは，その実行に気をつけた結果，人の動きがあまり気にならず，「楽しいな」と思うぐらいリラックスしてレースに集中できた。

２走・めぐみんは不安定な１走を前にするプレッシャーに負けず，自分のＯＬをしてくれた。めぐみん，裕子さんの中間計時を待つときの張りつめた気持ち。でも，そんな時でも「きっと大丈夫」と確信できる信頼感があった。裕子さんが帰ってきたとき，「ほら，やっぱり裕子さんだ!」男子の優勝に続いて嬉しさは頂点に達する。「私ってなんて幸せなんだろう」って心の底から嬉しくなった。ＯＬやってきて本当によかった――と思った。

今は代表として走る機会を与えてくれたＯＬＰのみなさんに感謝の思いでいっぱいです。大阪ＯＬＣのみなさん，運営お疲れさまでした。

☆２走・松波めぐみ

１走・まきちゃんはトップで帰ってくる大健闘。皆の応援と，「トップをキープしようと思わず，自分のペースを守って――」という裕子さんの声援を背にスタート。情けなくもすぐ追いつかれ，又，③→④ではとんでもないミ

ス。しっかり順位を下げた。でも３走が裕子さんだということが，どんなに心強かったか。ラスポからはひっきりなしの大声援。ふうっと体が軽くなり，「地に足がつかなく」なる‥‥。

今年も，３走・裕子さんの快走で逆転，優勝となった。リレーは何度走っても面白い。しかし今回ほど，「リレーは自分の力だけで走るのではない」と感じたことも無かった。自分の，ＯＬに対するパワーが落ちているだけに尚更。レース中，いつもなら「放浪の旅」が始まるようなミスから立ち直れたのも，ＯＬ歴２年のまきちゃん（大学４年でＯＬを始め，ＯＬＰですくすく育った私の親友）が初めての大舞台で見事に力を発揮できたのも，きっとリレーの――それもクラブを挙げてのリレーの――魔法のお蔭。ひとりひとりにお礼を言ってまわりたい。たとえば，いつも有形無形の大きな支えを下さった裕子さん，皆の応援をいっそう盛り上げたＯＬＰのチアガール（芝）聖子さん，美味しいあずきごはんでアベック優勝を前祝いして下さった（中島）多鶴子さん‥‥。（敬意を表して，３人のお姉様に登場していただきました。）

最後に，このような素晴らしい大会を用意して下さった主催者の方々に感謝したい。本当に，ありがとうございました。

☆３走・出田　裕子

９番ポストをパンチ。ラスポへ向かう道走りに入った。ひょっとしたらこの道走りの区間でとらえられるかとも思ったが，江角の姿も，白井由美の姿も見えない。ああ，ついにダメだったか。

ラスポ。マイクを持った太田君がいる。「ＤＡの‥‥」と叫び始める。「３位」という言葉を覚悟していた私の耳に，「トップ」という言葉が飛び込んできた。「えっ，本当？」

待ち受けるクラブ員の笑顔，声援。「アベック優勝やで！」の声がことのほかうれしい。三人揃ってのウィニングラン（なぜか初体験）もなかなか感動的だった。

いやー，よかった，よかった。

まきまき，めぐみん，NICE RUN!!

［Ｊクラス・茨木高校ＯＬＣ“西三川の仲間たち”］

☆１走・山中　信也

１月19日，我が茨高ＯＬＣは，阪急淡路駅・７時20分集合であった。２年生４人，１年生５人の計９人３チームで参加予定であった。しかし，７時20分の時点で来ていたのは２年生だけ。１年生は１人も来ていなかった。先行き不安である。

引退以来ひさびさのオリエンだったので，勘が鈍っていて，かなりツボったが，中学生には負けなくてよかった。

☆２走・穴本　千穂

久しぶりのオリエンでまさか優勝とは‥‥。まァ，第１走者と第３走者のおかげですけれども。

走り始めは，オリエンの感覚（？）をもう忘れていて，少し坂道とか怖かった。道を間違えたり，本当にあせりました‥‥。でも優勝できてうれしいです。（本当は１年生に頑張って欲しかったけど。）

☆３走・坂井　健太郎

前の日曜日に自転車で山道を５０km，金曜日に自転車で３０km＋耐寒遠足というハードな日程の後で，とりあえず無事帰ることのみを考えていた。思っていたよりも１・２走者の帰りが遅く，“ウム”もあるで，などと思いつつ待つ。雪が降る中，３時間近くも出番を待っていたが，こんなんで体動くんかぁ，と不安を抱きつつ穴本さんからタッチを受ける。茨高残りの２チームのアンカーは１年生である。これで負けたらどうしようと思いつつ地図開封場に向かう。これが遠い。無茶遠い。ここでもうバテバテ。途中多少ツボりつつラスポへ。これは少しヤバイかなと思ってテープ誘導に従って走る。この時はただ気力しか残っていない。なにせラスポからゴールまで８００m近い。なんとかトップでゴール。去年に比べきついコースで，穴本さんは良く頑張ったと感心した。なにより，この日は寒かった。雪の降る中オリエンなんてするものじゃない。インターハイの頃はあったかくなっているのかなぁ，と春を楽しみにしながら私市を後にした。

［総合リポーター：ＯＬＣふるはうす・北川　達也］

Ｊクラス優勝の茨木高校チーム

多摩ＯＬ
第９回ジュニアチャンピオン大会

●１９９２年１月１９日

●東京都　瑞穂町

去年は受験などでほとんど大会に出ていなかったので，'ＪＤＥ' で１位になった時はびっくりしてしまいました。ゲレンデは少々小さいような気がしましたが，比較的開けていて走りやすかったです。距離も短めだったので，走力に勝敗がかかっていたと思います。

Juniorチャンピオンということで，緊張しました。大会前にちょっとしたマラソン大会に出たので，その為にランニングをしばらくやっていたのが良かったような気がしています。

今後は，暇があればちょくちょく大会などに参加したいと思います。

［ＪＤＥ優勝者：梅田ＯＬＣ　・金木　愛加］

第２回関東高連競技会

●１９９２年１月２６日

●東京都五日市町

運営は勿論，地図作成まですべて高校生が行うＯＬ大会である。ゲレンデは五日市線の終点五日市町の南側を流れる秋川の南部地区でハイキングコースになっている。会場から３km以上離れ，急斜面も多く必ずしも良好な場所とは言えないものの，都下とはいえまだこのようなＯＬのためのゲレンデが残されていたのはうれしい。

MAP は作りたての１万分の１で，高校生の作としては立派なもの。ただ等高線が1.5 万と同じ５ｍであったのは一寸問題ではないか，という意見も聞かれた。地図記号にはＩＯＦの新規定（1990年制定）が使用されていたのが目を引いた。

参加者は９クラス約１５０名，会場の町民会館は広・美・暖の三つ揃いで，居心地が良いせいか競技終了後も参加者はゆっくりと談笑を楽しんでいた。

ゲレンデの中には高圧線が多数走っており，大きな変電所があるためかコンパスが微動もしない場所があってあわてた。

コースはいずれも率直な（易しい？）設定だったといえようが，ＨＥをはじめ殆どすべてのクラスの上位が１時間を切っていたのをみると，もう少し工夫してもよかったのではないかな，という考えが一瞬頭をよぎったのでした。

［リポーター：東京ＯＬクラブ・今　村　　元］

オリエンテーリング地図印刷
社内報　団体・サークルの機関紙　記念誌
ＰＲ誌　学校新聞　句集　歌集　詩集

有限会社 あしび印刷

〒220 横浜市西区西戸部町３－298
神奈川県教育会館前
☎045－231－5970（代）

オリエンテーリングの普及発展観

浦和市 三 科 伸 之

私達が，オリエンテーリング（OL）と出会ったのは，学校の課外授業であったり，市町村の講習会であったり，又は知り合いに勧められてと，きっかけは様々であろう。

私達は，OLの魅力にとりつかれて，OLを楽しんでいる。このOLをさらに発展・普及させていくには，どのようにすればよいのだろうか。

私達がOLと呼んで楽しんでいるもの，ここではスポーツ・オリエンテーリング（スポーツOL）と呼びたい。スポーツOLは，競技スポーツである。

OLの中に遊び心を加え，広い層に，一緒に楽しめるように工夫を加えたものをレクリェーション・オリエンテーリング（レクOL又はRCOL）と呼びたい。レクOLは，今までの時間と点数を競うものではなく，風景や自然を楽しめるものにする。

レクOLは，

（1）OLの中に遊び心を加える。
（2）広い層に楽しめる工夫を加える。
（3）遊びとしてのゲーム性を高める。

パーマネントコース（Pコース）地図への工夫

立ち寄ってもらいたい場所の解説を付ける。

（例）◆4番目のポストから 400mほど西へ行った所にOL博物館があって古代生物の化石が見られる。入場料・大人 400円，子供 300円，約20分で回れる。問い合せ：OL博物館 03-3111-1111（代） ◆6番目のポストから南へ10mほど行った所にOL公園があり，そこにあるOL展望台からの眺めはいい。入場料：50円，問い合せ：OL公園管理事務所 03-3111-1111（代）◆10番目のポストの地区は，古代遺跡のあとで，OL遺跡と呼ばれ，今から2000年前に‥‥‥ 問い合せ：OL市役所教育委員会 03-3111-1111（代） ◆11番目のポストから北へ20mほど行った所にOLランドパークがあり，ループコースターや，OLスクランブルコースターなどがあり，子供から大人まで楽しめる。冬はスケートもできる。入場料： 420円， 問い合せ：OLランドパーク 03-3111-1111（代）

OL大会での工夫

◆レクOLクラスの新設

参加年齢制限なし。基本的にグループ（男女問わず）。

コース上に課題ポイントを設け，課題を与え，必ず探し当ててもらうようにする。

コース中のどこか任意の場所に範囲を決めて観察ゾーンを設ける。その場所に着いたらみんなで周囲のものをよく観察してもらう。この観察ゾーンに関する問題はゴールまでに出題され，それをグループ内で相談して解答し，提出してもらう。

所要時間は，標準時間を決めておきそれに対しての早い遅いによって得点を与える。歩いても充分回れる時間にする。標準時間よりも，早い場合も遅い場合も1（マイナス）点となる。

このコースの難易度は，C又はNクラスとする。課題ポイントや，標準時間を設けることで，経験には関係なく楽しめるものとなる。

OL普及の3形態

（1）レクOLとしての普及
（2）レクOLからスポーツOLへ発展していくもの
（3）最初からスポーツOLとして，クラブ等で養成していくもの

［参考文献］
◇日本野外教育研究会編・杏林書院「野外活動テキスト」1988年
◇日本野外活動団体協議会編・杏林書院「野外活動マニュアル」1988年
◇荒木快英著・遊戯社「ウォークラリー入門」1981年

オリエンテーリング大会開催のマナーについて

三重県オリエンテーリング協会
理事・前 田 亮 一

近年，他都道府県のOLクラブ（以後他県クラブとする）が自分たちの地域に良いゲレンデが無いとの理由で三重県内へゲレンデを求めて進出してくる事が多くなってきた。

県内のクラブは，計画段階に東海地区OLクラブ連絡協議会や，県OL協会に開催地・開催日などを届け出て他の東海地区OLクラブの大会と重ならないように調整をしているが，他県クラブは，そんな事はお構いなしに開催地・開催日を決定，県OL協会へ後援の書類を送付してくるだけである。

今までにもビッグ大会用予定していた地域を使用されたり，また2度程は開催日が県内クラブの大会と重なったことがあり，今年4月に開催される大会などは三重県OL協会後援と明記された大会要項が配布された段階においても，三重県OL協会へ後援依頼書が送付されていないという有様である。

各OLクラブは，地元地域のゲレンデで大会を開催するようにし，どうしても他県へゲレンデを求めるのならば，その地域を代表する県OL協会・委員会へ計画段階に届け出，開催地・開催日の調整を受け，開催後にはゲレンデの地図と記録書を添えた大会報告書を送るのが最低のマナーではないでしょうか。

皆様の地域では，このような問題は起きていないでしょうか。この誌面をお借りし，皆様のご意見などお聞きしたいと思います。

パーマネントコース　りぽ～と

□１９９２年1月１６日（木）
長野県　　No.３　　～木92-1～
「上伊那」
［距離］　　１０ｋｍ
［ポスト数］１０本

昨年12月21日に挑戦したが失敗に終ったので，再度の挑戦となった。

ＪＲ飯田線「辰野」駅下車。「辰野町公民館」まで歩いて１５分。公民館の場所は電話（後記）できくと親切に教えてくれる。ＬＡＳＴ・ＭＡＰは昨年12月21日に私がもらったので，現在のところＭＡＰはない。したがって，公民館内の教育委員会に行くと，原本からコピーしたＭＡＰをくれるはず。マスターも教育委員会にあるので，その方をコピーしてもらう方がよい。

Ｏ－JAPAN の１月号には「宮木」駅下車と書いたが，公民館は「辰野」駅と「宮木」の中間にある。一覧表の宮原商店は現在無いので注意が必要。

ＭＡＰは１：25,000の旧式で，おそらく昭和47年頃にコースが開設された当時のままと思われる。私がもらったＬＡＳＴ・ＭＡＰを見ると黒と青の２色刷りで人家などもあまりない。これがコピーになると黒一色で天竜川や池などの青色は消えてしまい，Ｏ－ＭＡＰに馴れた頭の中は不安でいっぱいになる。

コースは「辰野」駅又は「宮木」駅から「伊那松島」駅まで，ひたすら南下する片道コースである。「コースの整備は保証できません」と教育委員会で言われたが，それほど荒れてはいない。５段階で採点すれば３と４の間ぐらい。山の中で小径が消えても，コンパスを正置して疎林（大会ＭＡＰなら白のつぎの薄緑色程度）の中を進めばよい。

コースは山３０％，畑４０％，山すそ２０％，舗装道路１０％で高低差は 150ｍぐらい。

ポストは２０年ぐらい経過しているはずだが，そのわりにはあまり錆びもせずしっかり立っている。標準の大きさで８本を確認した。③と⑩は見つからず。

辰野町は家並みの日陰に残雪があり，①や②も残雪５cm。①と②の間の「たつの海」は氷がはり，氷の上に鴨らしき水鳥が３０羽ほど並んでいた。［本誌92／２，10ページ の写真参照］

③は小さな用水路沿いのはずだが全く不明。用水路に沿って片道２００ｍを往復したが無し。遠回りして後の丘に登り丘の上から用水路一帯を見渡すが無し。丘の上のグラウンドも一周して見たが無し。どうも後味悪し。

⑤のあたりは雪の深さ２５cmぐらいで人跡全くなく，点々と獣の足跡が続くのみで，どこが道か分岐か全く不明。歩幅も小刻みとなって歩測も役に立たず，コンパスを頼りに「ミニ八甲田山の雪中行軍」となる。

⑩は舗装道路が大きくカーブしている所のどこかにあるはずだが，列車の時間に追われて走りながら左右を見回したが見つからず。

「休止になる」という噂もあるが，休止にするには惜しいコースである。難点は旧式ＭＡＰのため判読ミスをしやすい点であろう。

（辰野町町民会館　TEL. 0721-72-1447）

□１９９２年２月５日（水）
埼玉県　　No.２　　～木92-2～
「高麗（こま）」
［距離］　　１０ｋｍ
［ポスト数］１０ｋｍ　Ｏ－ＭＡＰ

西武池袋線「飯能」駅で乗り換え２駅で「高麗」駅下車。又はJR八高線「東飯能」駅で乗り換え１駅で「高麗」下車。

ＭＡＰは「高麗」駅にある（200 円）。マスターは駅前広場の隅にあり鮮明。

ＭＡＰは１：20,000のＯ－ＭＡＰで，精度は98％，昭和57年の調査。

コースは山８０％，原野２０％で高低差は 300ｍぐらい。コースはハイキングコースでもあり，よく整備されているが，雨後や雪解けは足もとに注意すること。このあたりの土質は滑りやすい。

ポストは１０本とも立っているが，③④は一部の心なきハイカーの落書きで，心が痛む思いである。④は錆びて穴があき，落ちた頭部をポールにかぶせた状態で，当日の空と同じ灰色の心境になってしまった。ポストはあればよい，というものではない。ポストは，あの真っ赤と純白の元気印の顔で私達を激励し，にこやかに送り迎えをしてくれるものであって欲しい。危篤状態のポストに出会うと歩く意欲が半減してしまう。

③→④は単調な尾根道だが，登りが多くややきつい。⑤は物見山（375m），⑦は日和田山（305m）から５０ｍほど南西方向へ下った所，⑩は巾着田（きんちゃくでん）の南端の広場の隅に立っている。

駅付近の道路はトラックやダンプが多いので注意して歩くこと。

④と⑤の間は５cmほどの残雪あり。

このコースは昭和58年に歩いたので２回目の挑戦であったが，コースは元のままだが，ポスト位置が１か所，ポスト記号が１つ変更になっていた。

コースから（⑨から）１km離れた所には，歴史的遺産である高麗神社や聖天院もあるので，ぜひ一度は行って欲しいものである。

関東ＰＣNo.が２であることは，このコースがＰＣの草分け的存在であることになるが，実は開設当時のコースは現在とは全く違う。当時の「高麗」駅は木造りで小さく改札口は現在と正反対の北側にあった。コースは宮沢湖の方へ回るもので，高低差も５０ｍほどであった。

また，電車を乗り換える「飯能」は第１回全日本ＯＬ大会が開かれた所で，私が初めて大会と名のつくものに参加したのもその大会であった。

（埼玉県教育局体育課
TEL. 0488-24-2111）

リポーター：
〒185 東京都国分寺市泉町3-5-6-104
木佐木　輝雄

XC-SKIとSKI-OL雑感

長野OLクラブ
美谷島　孝

横なぐりの吹雪は1日も続くとやがては晴れわたる。そんな日に，喧騒のスキー場からのがれるようにして，冬の陽ざしをいっぱいに浴びて1人静かにXCスキーイング。快い汗をかき，ザックから長年愛用のコンロとコッフェルを取り出し湯を沸かしてコーヒーを一杯。雪の結晶がキラキラと光り，うさぎの足跡も何を求めてか続いている。このすばらしさは，オリエンテーリングのように経験した者だけが知る。

私がそもそもXCスキーを始めたきっかけは，昭和49年3月に新潟県の塩沢町で開催されたJOLC主催のSKI－OL講習会である。長野県生まれといえど，ノルディックスキー（当時はアルペンに対してノルディックと呼ばれていた）を見るのもさわるのも初めてで，短時間に教えてもらったワックシングは，登りは滑り止めになるし，下りはより滑り易くなるという“魔法”の固まりで，何故？と深く考える余地もなかった。講習会終了後，すぐさまノルディックスキーの注文をし，それから18年に及んでいる。

受講前の2月に野沢温泉スキー祭りにおいてSKI－OL大会を実践したが，その時の参加者は全てが当日参加のアルペンスキーヤーであった。全員が重いスキーで登ったり滑ったりでたいへんな苦労であったが，物珍しさと賞品が豪華だったせいか好評であった。ノルディックスキーならもっと楽しかったことであろう‥‥と，後で思い出した。

長野県OL委員会でもSKI－OL大会開催に向け，地元スキーメーカーとノーワックススキー（滑走面に逆滑り止めの加工がしてある）の開発を進め，普及につとめた。昭和52年3月には，第1回長野県SKI－OL大会を飯山市で開催，同じ3月に栂池ではJOLC主催のSKI－OL指導者講習会が実施された。その後，菅平でも指導者講習会が開催され，長野県SKI－OL大会も昭和61年まで10回続き，以降，残念ながら途絶えてしまった。

さて，これまで私がXCスキーを楽しんできた中で感じたことと，SKI－OLに対する想いも含めて次の事柄について述べてみたい。

1．用具について

シュプールのない原野や森林，丘陵をディパックを背にスノーハイキングとしゃれるには，55ミリ以上の幅をもつノーワックススキーに，75ミリタイプのブーツとバインディングがふさわしい。

理由はスキー幅が細過ぎるとシュプールのない雪面では沈み易いからである。又，朝から夕方まで歩き回ることを考えると，雪質や気温によって適したワックスを塗り替える煩わしさのある，ワックス用のXCスキーは不便である。75ミリ幅のブーツのバインディングは親指と小指の両側を規制するので比較的意のままにスキーを扱える。ブーツもレーシングタイプに比べ深めになっているが，ロングスパッツを着用すると雪がブーツに入らず保温効果もあり有効である。

XCスキー競技の場合は，コースが定められており，2本のシュプールがきれいにスノーカッターで作られている。フリー走法（スケーティング）が許されている場合は，コースも幅広く圧雪されている。スキーは当然，細く長く軽いレーシング用で，バインディングもそのブーツに合ったものになる。滑り易くする為のグライダーワックスや滑り止めの効果をもたらすワックスの種類は500種を越えるという。その選択と使い方は経験に頼るしかなく，勝敗を左右する大きな要素である。

ブーツ＆バインディング＆スキーの関係は，スキーにかかる荷重の影響が大きく，それが増加するにつれブーツも頑丈な固い物が要求され，それらに耐える丈夫なバインディングが当然必要となり，更にスキーも幅広くネジの効く厚さも要求される。究極はテレマークや山スキーのセットに至るのである。3つのバランスがとれてこそ，それぞれの目的に応じたスキーイングが楽しめる。

＜SKI－OLの為のスキー＞

大会が各地で盛んに行われ，スキー技術がかなりタイムに影響する程の長いコース距離の場合，レース用XCスキー（ワックシングタイプ）の使用が有効となるだろう。しかし，湿った雪が一晩にドカッと（通称ドカ雪）降ることもある長野県でのSKI－OLを考えると，現状ではノーワックススキーが良いと思う。次にスキーの長さであるが，アルペンスキーの経験者ならご存知のように短いスキーは操作性が良い反面，起伏の多い所での直進滑走では安定感に欠ける。XCスキーでの転倒は全く予期していない所で突然前のめりに顔から突っ込むので要注意。ツーリング用と呼ばれているやや幅広のもので，身長＋20cmぐらいの長さが適していると思う。SKI－OLの場合，そのテレインの状況，コース整備状況が推測できるのであれば，それに応じたスキーを選択し競技に臨めればベストである。なお，ストックについてはシュプールのない道を好んで行く人はリングの大きいものが絶対に良い。

2．SKI－OL　MAP

マップほど多岐にわたる疑問と検討要素が多いものはない。全く私感であるが，SKI－OLマップはフットOLに要求されるランニングをしながら確認できる特徴物の全てを記載するような概念をそのまま持ち込むことは，地図調査の労力を考えると過剰のような気がする。（もちろん，そのテレインをフットOLで使うのなら必要）　積雪によっては切り株や倒木，岩はおろか沢まで隠し確認できないこともあるからだ。SKI－OLマップはテレイン全体をマクロ的にとらえるべきだと思う。

第4回大会（長野県飯綱高原）では，無雪道路はグリーンのV印を，主催者のセットしたシュプールはグリーンの点線で表記することに習いマップにガリ刷り

で加えた。その後，長野ＯＬクラブの大会では，フットＯＬの通行可能度に対し滑走可能度に名称を変え，グリーンの濃淡と白の３段階表示を試みた。更に調査日の積雪量を参考に付加したが，大会前の降雪でかなり滑走範囲が広がり，現状に合わないものになってしまった。昭和58年２月のことである。

次にマップの持ち方であるが，先日のアルベールビルでのＸＣスキーをテレビで見た方も多いと思うが，滑走中は両手がストックでふさがっており体を前に押し出す為にかなりの腕力も必要とする。マップは必然的に首からの吊り下げ式となる。前出のクラブ大会においては，ＳＩＬＶＡのＳＫＩ－ＯＬマップケースを真似て参加者数分手作りし，マップ入りで提供した。これはマップを薄地のダンボールと共にナイロン袋に入れ，ボール紙の中心を更に下に敷いたボール紙とネジ１本で固定した回転式である。（首に吊した状態でのマップの正置が可能）ここでのミスはネジが鉄であったことだ。マップケースを主催者が準備するか，参加者が用意するか，あるいはもっと便利なマップ形態が考案されるかはチェックカードと共に今後の課題である。

３．コース

先進国・北欧のＳＫＩ－ＯＬマップを見ると，距離はフットの２倍以上，縮尺は 2.5万とか３万分の１であり，ポスト数は半分程度である。やはりポスト間では方向決定技術の他，スキーイングに専念できるだけの距離があることが，競技をよりおもしろくするのだと思う。そして早期スタート者が不利とならぬようなマップ上に示された道，小道の圧雪と，あきらかに参加者が選ぶであろう最短コースの圧雪（シュプール）に主催者が努力することが競技を成功する為に大事なことだと思う。

４．終りに

ＳＫＩ－ＯＬの数々の問題点は試行錯誤の大会を重ねることによって多くの参加者から意見が出され，打開されていくと思う。

ＸＣスキーの楽しさを知ったオリエンティアは技能向上の目的の為，ＸＣスキー大会にも参加するようになるだろう。長野県内では市民レベルでの大会が各地で開催されている。来シーズン前にはそれらの大会を調べ情報として提供したいと思っている。

３月は雪の状態も安定し陽ざしもやわらぎ，気持ちの良いＸＣスキーイングが楽しめる。オリエンティアの皆さん，全日本が終ったら雪解け前に一度体験したらどうだろう。

以上，長々と私感を書きつづりましたが，参考までに私の使用しているスキーのサイズと，ＸＣスキーに関する図書をご紹介いたします。

	ツーリング SKI-OL	ＸＣスキー レース	山 スキー
スキー	190cm x 58mm	205cm x 44mm	175cm x 75mm
ブーツ	75mm幅	レーシング用	登山靴
ストック	135cm	135cm	135cm

（身長 170cm，体重 57kg）

[参考になる図書]

「スキーオリエンテーリング入門」
大沼 勝 ベースボールマガジン社
「歩くスキー」
横山ノルディックスキースクール 成美堂出版
「歩くスキー」
今村 源吉 北海タイムス社
「歩くスキー入門」
丸山 庄司 大修館書店
「ラングラウフスキー」
杉山 進 講談社
「ラングラウフスキーと健康づくり」
共著 オーム社
「クロスカントリースキー ダウンヒルテクニック」
スティーブ・バーネット 自由国民社
「スキーラングラウフテクニック」
ルルドール・スカール，オッレ・ラルソン 自由国民社
「クロスカントリースキー」
北村 辰夫 ベースボールマガジン社
「クロスカントリースキー入門」
ロナルド・クロフォード ベースボールマガジン社
「クロカンスキー入門」
岩岳スキースクール スキージャーナル社
「競技スキーテキスト（クロスカントリー編）」
全日本スキー連盟 スキージャーナル社
「テレマークスキーイング」
日本テレマークスキー協会編 山と渓谷社
「歩くスキーのすすめ」
丸山 久雄監修 どらねこ工房
雑誌「クロスカントリースキー」
自由国民社

世界のエリート達

齋藤 英之

スウェーデンのオリエンテーリング専門誌『スコッグス・スポート」誌（森のスポーツの意）は毎年年間世界オリエンティア・ランキングを発表しているが，1991年のランキングはチェコでの世界選手権の結果を反映したものとなり，男女共に半数が北欧諸国外のオリエンティアで占められたのが大きな特徴となっている。

・・・・・

男性ランキング１位は言うまでもなくヨリエン・モーテンソンである。モーテンソンは世界選手権クラシック・ディスタンスおよびリレー（個人成績）での１位に加え，ショート・ディスタンスでは５位，世界選手権の前哨戦であったドイツ３日間大会では２日間首位を占めた後の４位であった。世界選手権クラシック２位のケント・オルソンが同様にランキングの２位を占めた。すばらしいことに

オルソンは84，87，89，そして91年にトップテン入りを果たしている。

クリスチャン・アエベルソルドのランキング３位は目を見張るものがある。アエベルソルドは確かに世界選手権クラシックではシルド，アレクセイエフ，エリクソンらに遅れを取り６位であったが，ショート，リレーでは共に４位であった。その能力はドイツ３日間大会での３位にも示されている。

エストニア人のシルドは世界選手権ショートで優勝し，センセーションを巻き起こした。ベテル・コサックの後，６位にランキングされたエリクソンは世界選手権ショートではミスをおかしたが，北欧選手権では２位であった。また，世界選手権クラシックではアレクセイエフに２３秒差で敗れたもののランキングでは上位に位置付けられた。これはドイツ３日間大会およびスウェーデン５日間大会（オーリンゲン）での優勝が評価されたものである。

世界選手権ショート３位のマッチン・ヨハンソンはランキング入りした４人目のスウェーデン人である。

驚くべきことにランキング入りしたノルウェー人は１人だけであり，それも10位である。ビョールナル・ヴァールスタッドは北欧選手権者であり，世界選手権ショートではノルウェー人での最高位であった。

ホーヴァルド・ドヴェイトとロルフ・ヴェストレの２人のノルウェー人とチェコ人のジョセフ・ヒューバチェックは選から漏れた。

・・・・・・

女性ランキングについては上位３名の順位決定は難しい。世界選手権ショート１位はヤーナ・シェスラロバであるが，カタリン・オラーが取ったクラシックの金の価値は重く，またオラーはショート（５位），リレーでも良い成績を収めた。クリスチーナ・ブロムクビストはクラシック３位，ショート４位であるが，決め手に欠ける。

上位３名の次には同等の力を持った３名が集団を形成している。マリータ・スコッグムは世界選手権クラシック３位，

ショート５位，またリレーではスウェーデン・チーム優勝に大きく貢献，４位は順当と思われる。アダ・クチャロフはクラシックには出場していないが，ショートではわずかの差で２位であり，リレーではクチャロフ以上の成績を残した者はわずか２名である。またオーリンゲンでの２位も重要である。ヤーナ・ガリコバは世界選手権ショートでは７位，クラシックでは銅を獲得したが，これは十分なトレーニングの成果である。

ランヒルド・ブラットベリは初めて世界選手権リレー代表に選ばれ，最高の成績を収めた。クラシックではランヒルド・ベンテ・アンダセンよりも上位の６位であったが，両ランヒルドとも今シーズンはその力を十分には発揮し得なかった。

女性ランキングの第３グループはクバトコバ（クラシック６位，ショート９位），カタリーナ・ボリ（９位，８位）である。

10位以下にはマリア・リーサ・ポーティン（フィンランド），ウルリーカ・オーンハーゲン（デンマーク），カティ・フェッテ（ニュージーランド）と続く。

［１９９１年ランキング］

男性ランキング

1. Jörgen Martensson（スウェーデン）
2. Kent Olsson（スウェーデン）
3. Christian Aebersold（スイス）
4. Sixten Sild（エストニア）
5. Petr Kozak（チェコスロバキア）
6. Hakan Eriksson（スウェーデン）
7. Vlådimir Alexejev（旧ソ連）
8. Martin L. Johansson（スウェーデン）
9. Urs Fluhmann（スイス）
10. Björnar Valstad（ノルウェー）

女性ランキング

1. Katalin Olah（ハンガリー）
2. Jana Cieslarova（チェコスロバキア）
3. Christina Blomqvist（スウェーデン）
4. Marita Skogum（スウェーデン）
5. Ada Kucharova（チェコスロバキア）
6. Jana Galikova（チェコスロバキア）
7. Ragnhild B. Andersen（ノルウェー）
8. Ragnhild Bratberg（ノルウェー）
9. Marcela Kubatkova（チェコスロバキア）
10. Katarina Borg（スウェーデン）

以上 Skogssport 10/91，p. 9 より

［１９９０年ランキング］

男性ランキング

1. Håvard Tveite（ノルウェー）
2. Niklas Löwegren（スウェーデン）
3. Allan Mogensen（デンマーク）
4. Jörgen Martensson（スウェーデン）
5. Petter Thoresen（ノルウェー）
6. Håkan Eriksson（スウェーデン）
7. Keijo Parkkinen（フィンランド）
8. Tomas Prokes（チェコスロバキア）
9. Martin Johansson（スウェーデン）
10. Reijo Mattinen（フィンランド）

女性ランキング

1. Ragnhild B. Andersen（ノルウェー）
2. Ragnhild Bratberg（ノルウェー）
3. Yvette Hague（イギリス）
4. Katarina Borg（スウェーデン）
5. Anne Line Nydal（ノルウェー）
6. Frauke Bandixen（スイス）
7. Eija Koskivaara（フィンランド）
8. Annika Viilo（フィンランド）
9. Christina Blomqqvist（スウェーデン）
10. Lena Molin（スウェーデン）

以上 Skogssport 10/90，p. 17 より

情報あれこれ

■ＡＰＯＣ　プレ・イベント

兼・世界学生選手権大会日本代表選手選考会

主　催：ＳＱＵＡＤ，日本学連技術委員会
後　援：ＡＰＯＣ実行委員会（申請中），御殿場市教育委員会（申請中），
　　静岡県ＯＬ協会，＜オリエンテーリング広報誌＞Ｏ－ＪＡＰＡＮ

◇

日　時：１９９２年４月２９日（祝）
場　所：静岡県御殿場市
会　場：御殿場市青少年会館（御殿場駅より約３ｋｍ）
形　式：ポイントＯＬ
地　図：１９９１年早稲田大学ＯＣ作成「乙女道路」
　　縮尺　１：１５，０００　等高線間隔　５ｍ　通行可能度　３段階
クラス：ＨＡＬ（７ｋｍ）　ＨＡＭ（５ｋｍ）　ＨＡＳ（４ｋｍ）
　　ＨＢ（５ｋｍ）　ＨＣ（３ｋｍ）
　　ＤＡＬ（５ｋｍ）　ＤＡＳ（４ｋｍ）　ＤＢ（４ｋｍ）
　　ＤＣ（３ｋｍ）
　　当日申し込み　ＯＡ　ＯＢ　ＯＮ　（マスターマップ）
会場への交通手段：ＪＲ御殿場駅よりバス　東山循環または東部循環「東山キャンプ場入口」下車（約１０分）
　　＊駐車場の用意はできません＊
参加費：１５００円（高校生以下１０００円）
申込み方法：
１．会場申し込み　早大ＯＣ大会　全日本ＯＬ大会
２．郵送申し込み
　次の①②③を同封のうえ，申込み先に郵送してください。
　①所定の申込書（Ｏ－ＪＡＰＡＮ様式可）
　②参加費相当の定額小為替または為替（指定受取人欄は無記入のこと）
申込み先：〒410-35　静岡県西伊豆町仁科２０２－２　石田アパート７号
　　佐藤　志保　宛
申込み締切：１９９２年４月４日（消印有効）
問合せ先：　村越　久子　☎０５４３－３４－９７５４

■オリエンテーリング・パーマネントコースの一時閉鎖のお知らせ

◇

昭和５０年に関東コースＮｏ．６４として設置した「黒磯板室温泉」のオリエンテーリング・パーマネントコースは次のとおり一時閉鎖されます。

１．閉鎖期間　　平成４年３月２０日〜平成６年３月３１日まで
２．閉鎖理由　　国民宿舎「幾世荘」の取壊し工事および保養施設新築工事の為

■中・四国・九州地区にもクラブ連絡協議会発足の動き

先日，島根県の財間定義氏からいただいた情報によると，中・四国・九州地区でもクラブ連絡協議会設立に向けて動きがあるとのことである。（詳報は次号）

編集部より

◆たくさんのご投稿をいただき嬉しい悲鳴をあげています。それなのに，クラブの大会，税務申告，休日の２日間を所用でつぶしたりしながら，またまた下旬の仕上がりとなってしまいました。また，誌面の都合により，「こどものためのオリエンテーリング」を，今回は休ませていただくことにしました。◆昨年来いろいろとお願いしてきたことにお応えいただき，お陰様で今後の誌面も充実しそうです。ご投稿以外にも，各部会への協力お申し出もいただいており，４月からは編集・発行の新体勢を整えて，より前進を図っていきたいと思います。この号発行後，各部会の進め方と本誌の編集・発行方針を私案としてまとめて，お申し込みの方々に「編集通信」としてお送りいたしますので，よろしくお願い申し上げます。◆ところで，上記の税務申告ですが，昨年度は完全な赤字決算でした。「全日本オリエンテーリングクラブ」としては，簡単ですが会計報告をさせていただきたいと思っていますが，次号までお待ちください。◆いずれにしても，購読者数の増加を期待しています。多分３月末にはこれまでの再多数に達するでしょうが，継続購読手続きのペースが昨年より幾分遅い感じがあります。お早めに。

―――――――――――――T――

O－JAPAN　92／3
No.１０４　1992. 3. 10発行

発行／O－JAPAN
発行人／田口　昭子
〒233 横浜市港南区日野南7-9-5
TEL. 045-891-7004
FAX. 045-891-2500
郵便振替口座／横浜７－　46870
（加入者名）O－JAPAN 編集部
購読料　年間４月〜３月 ¥3,000
（高校生以下）　¥1,800
１部あたり頒布価格　¥250

編集責任者／田口　肇
Chief Editor: Hajime Taguchi
Editorial Address:
7-9-5, Hino-minami, Kohnan-ku
Yokohama, 233 Japan